リネーブルの活動を語る / つづる / 発信する

リネーブル ニュースレター

vol.1
2024/9

メンバー活動報告 01

スポーツチャレンジプログラム

気難しそうな職人さんたちが最後は笑顔になった

リネーブルニュースレターでは、リネーブルの取り組みや関わる方々のインタビューを発信します。活動報告第１回は「スポーツチャレンジプログラム」を担当するＭさんとＮさんです。これまでリネーブルの居場所や地域イベントで体を動かすプログラムを実施してきました。今回はじめて企業様からのご依頼を受けて研修講師を務めました。Ｍさん、Ｎさんに、プログラムづくりの心掛けや今後の展開について聞きました。

研修の依頼主は、刈谷市の屋根・外壁施工会社「**株式会社アウテック松坂**」様です。年に1回、契約している職人さんや社員さんを対象に「安全大会」を開催しています。リネーブルでは3DCADの治具製作などで提携し、お世話になっていました。穂谷社長がスポーツプログラムの取り組みを知り、安全大会の講師として声を掛けてくださいました。

Nさん：午前の約1時間プログラム講師を務めました。最初のうち職人さんの表情が厳しくて緊張しました。なるべく自己開示を心掛けて、自己紹介で『すごい緊張しています』と言って。そこでちょっと和んで時間が経つにつれて、みなさんの動きもスムーズになっていきました。

厳しい暑さ寒さの中でも働く熟練の職人さん。体力に自信があるかと思いきや、建築現場では高齢化が進み、体の悩みを抱える方も。事前に参加者さんの傾向や体の困りごとなどを聞き、二人で試行錯誤しながら「参加者に合わせたプログラム」を構成していきました。当日は職人さんや社員さんの様子を見ながら、体に負担のないよう臨機応変にルールを変えていきました。

Nさん：参加する方にどうやったら喜んでもらえるかを考えました。それが今までとの違いですね。

Mさん：これまでは楽しい遊び要素が中心でした。今回は遊び要素もありつつ、職人さんの悩みを聞いて腰痛予防のトレーニングも入れたんです。最後、みなさんが笑顔になってくれました。自分にとって嬉しい収穫でした。

いちばんの反省点はリハーサルのやりすぎ？

「スポーツチャレンジ」の始まりは、MさんNさんともに体を動かすことが得意だったから。リネーブルでは「自分の得意を活かして、人や社会とつながる」ことを大切にしています。そこでストレッチの専門スキル習得をバックアップすることに。MさんとNさんは群馬県高崎市を訪れ、パーソナルトレーナー塚田哲弘氏のもとで学びます。そして、リネーブル居場所や地域イベントで体操教室や体力測定プログラムを実践してきました。今回の企業向けプログラムとの違いはあるのでしょうか。

Nさん：僕は今回のように事前情報があって、スケジュールを組む方が楽しいし合っているかもしれないです。

Mさん：僕の場合はワイワイやるのが好きなので、イベントで子どもたちと一緒にやる方が導入としていい経験になりました。Nくんは本番緊張したっていうけど、僕は前日の方が緊張しました。リハーサルをしっかりやったからと、本番は吹っ切れた部分もありました。

入念に2回リハーサルを行い準備万端。しかし前日にちょっとしたトラブルが起こります。あるストレッチで使う道具を2種類用意していました。リハーサルを見ていたスタッフが『道具を1つに揃えたほうがいいよ』と提案し、足りない備品を買いに行ってくれます。準備不足の様子をその場にいたリネーブルの仲間に見られてしまいます。二人はとても悔しかったそうです。

Nさん：去年のメッセナゴヤ出展やこれまでのイベントは、とにかくリハーサルを重ねていました。それが裏目に出たのか「これで大丈夫だろう」って、つい思ってしまったんです。

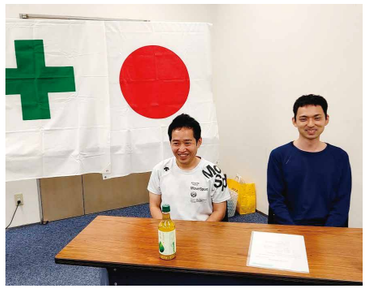
Mさん：今回いちばんの反省点でした。

相手を置いてきぼりにしないことが大事

この経験を次に活かしたいと意欲的なMさんとNさん。今後に向けて、それぞれ考えているブラッシュアップのポイントを聞きました。

Mさん：次回は、参加する方に心を開いてもらえるアイスブレイクをもっとやりたいです。今回はアイスブレイク・トレーニング・遊び要素・ストレッチ、クールダウンという形にできた。Nくんがいろいろ提案してくれて、最初にどれだけ心を開けるか、その大切さがわかりました。

Nさん：塚田コーチに『相手の気持ちを置いてきぼりにしないことが大事だ』と教わりました。筋トレであれストレッチであれ、決まったやり方も大事ですが、無理できない人もいる。僕は緊張してつい淡々と進めちゃうけれど、相手のいいところを見つけて、ほめて、やる気になってもらうことを意識したいです。みなさんの表情を見ながら、柔軟にメニューを変えていけたらと思います。



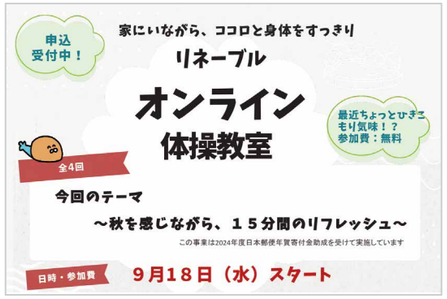
左からリネーブルメンバーMさん・Nさん

最後に、荒川代表からスポーツチャレンジプログラムの意義について聞きました。

荒川代表：初めはアイスブレイク、そして企業様固有の課題へのアプローチ、そしてチームビルディングを意識しています。体を動かしながらも遊び要素があり、その時間を楽しんでもらえる構成を、彼らがしっかり考えてくれました。通常の研修よりも面白みのあるプログラムになっています。またMくんとNくんの姿を見て、リネーブルメンバーが「こんなことを仕事にしていきたい」「自分の得意なことで頑張りたい」と思えること。お互いにとってのよい循環を目指しています。

text｜エスラウンジ

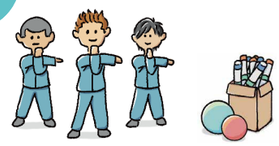
NEWS / Information



参加募集中　オンライン体操教室

15分間の簡単な体操でココロと身体をリフレッシュするオンライン体操教室です。運動不足を感じている方や、最近少しひきこもりがちな方、お年寄りの方も大歓迎です。詳細はチラシ、リネーブルウェブサイトをご覧ください。

企業・団体研修　スポーツチャレンジ



健康経営の一環として、100歳まで働ける身体を作るためのプログラムです。ゲーム感覚で身体を動かし、認知機能を高めます。普段あまり交流のない社員同士が一緒に運動をして、チームビルディングします。

パーソナルトレーニングを学ぶ若者が実践的なスキルを磨き、社会に飛び出す貴重な学びの場でもあります。興味のある方はぜひお問い合わせください。

お問合せ：info@linable-career.co.jp
（LINABLEキャリア 荒川）

ごはん作りすぎ

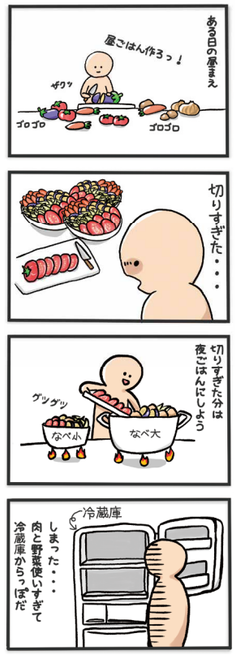


Illustration:

リネーブルは「今の自分にちょうどよい働き方」を見つけるコミュニティです

今年８周年を迎えたリネーブルは、居場所やデジ・モノプロジェクトでの学びを経てLINABLEキャリアで働き始める若者が増えてきました。従来の1日8時間・週5日の働き方にとらわれず、自分のペースで働き、自立できるよう、みんなで力を合わせて働く場を創っています。

具体的にはAIやIoT技術を活用したカメラ検査や合否判定システムの開発、企業向けの3DCAD導入研修、2DCADから3DCADへの移行支援など、実践的なプロジェクトを展開しています。組付作業では企業と協働して、不器用な人でも作業時間を効率化できる治具の開発に取り組んでいます。若者たちは自分の興味や適性に合った仕事に挑戦し、仕事に必要なスキルを実践的に学んでいます。

地域社会への貢献も大切にし「100均グッズで始めるスマートハウス」や「真空成型器でスイーツの型を作ろう」といった市民・子ども向けのワークショップを開催しています。若者が社会とつながり、自分のスキルを活かす貴重な経験の場となっています。

これからも、一人ひとりのニーズに寄り添い、個々人の状況に応じた多様な働き方を実現していきます。応援、よろしくお願いいたします。

利用を希望される方へ

対象：18歳～概ね35歳までの若者で
安城市まで通える方
(直接お問い合わせください)

サポーターのご案内

社会課題解決に向けた取り組みに共感いただくとともに、様々なコラボレーションを通じて、より大きな社会的インパクトを生むプロジェクトに発展できるよう、業務委託・コラボ企画・ご寄付などご協力をお願いいたします。

お問い合わせフォーム
気軽にお尋ねください ▶

［ 発行元・お問い合わせ先 ］

特定非営利活動法人リネーブル・若者セーフティネット

〒446-0072　愛知県安城市住吉町荒曽根 1-245　アワーズビル2F
TEL/FAX：0566-93-1733（月曜～金曜 10:00～17:00）
MAIL：info@linable.or.jp ｜ Web：https://linable.or.jp/

LINABLE
NPO法人リネーブル

リネーブルニュースレター vol.1　2024年9月発行

この事業は令和6年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業の助成を受けて実施しています

リネーブルパートナーに聞いてみよう［第1話］

黒田 洋介さん

安城市役所福祉部 社会福祉課 福祉相談係

リネーブルに関わる方々へのインタビュー企画。第１話ゲストは黒田洋介さんです。安城市社会福祉課で生活困窮者支援を担当する黒田さんは、設立当時からリネーブルの歩みをよく知る方です。安城市役所を訪ねて、メンバーが黒田さんにインタビューを行いました。

「自立とは何か?」という問い

メンバーM(以下、M)：はじめに、リネーブルに関わったきっかけを教えてください。

黒田洋介さん(以下、黒田さん)：出会いは平成２９年頃です。僕は当時、安城市社会福祉協議会で生活困窮者への貸付を担当していました。相談者さんはお金のことで困っているけれど、お金を借りなくて済むなら負担を軽くできる。さまざまな制度を使ってご本人がいちばん負担にならないよう支援していました。いろんな支援をするために地域の情報を得るなかで荒川さんに出会って。きっかけを思い出せないぐらい、色々な話をしてきましたね。

リネーブル代表荒川(以下、荒川)：黒田さんが担当してくださった男性は、あの時に借りたお金でスーツを着て面接に行き、いまでは正社員です。親子の関係もよくなりました。

黒田さん：いいお話を聞けるとありがたいです。

M：当時と今でリネーブルの変化はありますか。

黒田さん：はっきりとありますね。僕から見て、当初は集いの場を必要とする人たちが中心でした。その方にとっての精神的な拠り所、それこそがリネーブルですという感じ。それからリネーブルキャリア(有限会社LINABLEキャリア)ができた。ＮＰＯ法人リネーブル・若者セーフティネットが心臓部だとすると、その上にいろんな建物が建っている。リネーブルらしさを失わず、そこから一人ひとりに合った形で仕事につなげていますよね。ただＮＰＯ法人の枠組みですから、企業から見てどうしても慈善事業の一環という扱いになりがちです。これが海外であればＮＰＯ法人やボランティア団体、自助グループでも事業が成り立つかもしれない。荒川さんはこちらも企業である方がいいと考えられた。企業同士だから相手の姿勢も変わり、いろんな連携ができると。最先端をいく感じですね。

M：居場所という形から、仕事をはじめ外へつながるきっかけが増えたイメージですか。

黒田さん：そうですね。キングギドラみたいに一本頭から頭が増えた。最初の居場所も、新しいフィールドも同じだけ大事で、それらを連結することでシナジーを生み出す存在になっていったんだと思います。福祉では「自己覚知」といって自分を見つめ直すこと・自分はこうありたいと定めることが大事とされています。まずはそこに至るためのリネーブルがあり、リネーブルキャリアで仕事に対するスキルや能力を磨く。居場所があるからこそ、ステップアップした人も安心して一歩を踏み出せる。僕は相互的な関係だと受け止めています。一般的なステップアップは登りっぱなしと思われがちですが、転んだときにどうするかを見ていないことが多い。自分の力でお金を稼いで、自分の力で生活をすること、それだけで果たして自立なのか？という問いかけを、リネーブルさんの姿勢から感じています。

「無いからできない」ではなく「無いなら作ろう」

M：リネーブルと他団体さんとの違いはありますか。

黒田さん：明確にありますね。僕らは「箱物にとらわれない」って言います。通常は事業所ごとにメニューがあって、まず通う練習から。居場所、次に社会貢献のボランティア活動、そして職場体験。でも職場体験をやっていない事業所さんは、市役所に相談にみえます。要は箱があって、その箱に従って動きます。リネーブルさんは「今後この人が向かう先には、こういうものがあった方がいいよね」と動く。前例が無いからできないのではなく「無いなら作ろう」という姿勢が非常に強い。その人の個性に合わせた能力の獲得を徹底しているのは、大きな違いですね。

M：僕も居場所からスタートし、運動が得意だったので他の団体さんにフットサルのボランティアに行き、好きだから面白いからとやっていました。その後パーソナルトレーナーの勉強をして、今はリネーブルで体操教室の講師をしています。自分の得意なことをやれるようになりました。

黒田さん：いいことですね。日本は第二次世界大戦以降、政策として工場労働者を増やす産業スタイルを万人に求めました。今は子育てをしながら共働きできる政策ですね。少子高齢化になっても夫婦で働けば税収が増えるので、サラリーマン的な働き方をする人をベースに国を作ってきた。僕自身もサラリーマンですから1日8時間働きましょうと。でも本来、万人向けなんて存在しないですよね。どこか軋轢があり、無理がある。今でこそ日本人は時間に対してシビアな国と言われますが、これは東京タワーができる頃に作られた日本人像です。もっと正確に言うと、始まりは守るけど終わりがない(笑)。高度経済成長期に線路をひき電車のダイヤを刻んで、日本人は時間を守るようになったんですね。

日本では、いろんなことをやりたい人があまり認められない

荒川：1日8時間、週5日働く世の中の当たり前を崩したい。働きたい人は1日１０時間でも働きたいし、他にやりたいことがある人は1日４時間でいい。でも４時間しか働かない人は一人前とみなされない。それってやっぱり窮屈です。

黒田さん：僕はいろんなことをやりたい人間ですが、日本ではあまり認められないんですよね。リネーブルさんの理念として、真っ向からこの状況を崩したい！その姿勢が面白い。

福祉の世界に来る前、僕は施術業、いわゆるマッサージをやっていました。小学生の頃から東洋医学が大好きで、高校卒業後に施術を学んで開業して。お客さんが結構ついて、カナダのトライアスロン選手や全日本ヨットチームに呼ばれたりして意外と売れたんです。よく喋るから(笑)。それで海外へ勉強に行った時、手や足のない方が幻肢痛に悩んでいた。昔の文献に従ってマッサージすると良くなりますが、痛みを取り除いても手足は戻らない。この人たちの「ないものを作れる人になろう」と義肢装具を作る整体師を目指して、２３歳で大学に入りました。施術で働きながら大学に通って、そこから障害者施設、児童養護、社会福祉協議会に入って生活困窮者支援に至ります。１９歳～２０歳の頃には漫画家の背景を描くアルバイトをして、あとは文章が得意で、この能力はお金になるぞと。文章をお金に変える挑戦もしましたね。ただ公務員は職場によって副業が禁止なんです。そもそも本業・副業と分けるのが疑問で、決まった時間ここで働くから対価を得るだけ。他の仕事もやりたい気持ちを抑えている人は、結構いるのかなと。僕は逆に制限をかけないとまずい(笑)。今はまだ自分に合う働き方ができる世の中じゃない。それを崩そうと思っている荒川さんに、現状の仕組みが合わない人をつなげるのは、非常に意義がありますね。

「自分はどうありたいか」を定める機会を持ってほしい

M：リネーブルに就労準備支援(※)を依頼してくださった理由にもつながりますか。

黒田さん：そうです。真っ先に相談しました。その方に合わせてどう支援するかを、正面切って向き合ってくれるからです。就労準備支援が必要ということは、本人がいますぐ働ける状態ではない。そこを行政としてサポートしていきます。荒川さんから僕に紹介があるときは、すでに荒川さんと相談者さんの信頼関係ができています。一方で僕からリネーブルさんにつなげるときには「あなたが言うならやってみようかな」と思ってもらえるだけの信頼がないと。とくに相談者さんは複雑な状況に置かれていたり、人が信用できない状態です。行政側がなんとなく就労準備支援を使って、あとは事業所の支援者に任せようと四角四面のやり方をしていたら、ご本人は通うこと自体が嫌になってしまう。お互いが安心感を持てる形にしたいんです。

M：２０２４年4月からスタートして、3ヶ月が経ちました。手応えや気付きなどはありますか。

黒田さん：荒川さんは当初から時間をかけた方がいいと言ってくれていた。実際には最長1年間使える制度です。現在は3ケース取り組んでいて、その人に合わせたスケジュールを組みます。ニート状態の方たちと関わっていると、ほとんどの人に負い目があるんです。自分は家族に経済的負担をかけていて、挑戦したいことがあっても言えない。僕は「家族に迷惑をかけることじゃないよ、いつか国を支える側にまわる、そのための準備を支える制度だから大丈夫」と説明します。本来使うべき人が就労準備支援を使って、本人の負担感を減らしたいですね。これまでに5～6ケース取り組んで、今のところ誰も辞めず、ここなら続けてみたいと答えてくれます。

荒川：医療機関で診断を受け、障害者手帳を取る方々が、就労移行支援事業所もしくは就労継続支援A型・B型事業所に行き、かえって働く選択の幅が狭くなっていることもあります。

黒田さん：就労準備支援ではA型・B型も「就労」と認められます。すると事業として終了してしまうのが、やや心配なところがあります。制度が合うから使うやり方はよくても、制度の枠に閉じ込めるやり方は良くない。その人の自己決定ありきで、選択権の自由や自己決定を防ぐような押しつけは、支援ではないと思います。それから障害者手帳を返納して、自分の力でやりたい方の選択肢が欲しい。心が平穏な状態で、デメリットも理解しつつ前向きな選択で手帳を返納することが、日本において勇気のいる選択になってしまう。それでもやってみたいという意志を叶える仕組みがないんですよね。枠を飛び出た支援となってくると、自分の選択は自分で責任取るようにと放逐になっているのが現状です。

荒川：自分の中で枠を作らないほうがいいかもしれないね。こういうことをしてもらえたら、自分はこういうことができるんだって、可能性を広げる方向にいきたいですね。

黒田さん：先程も言ったように日本の社会制度はサラリーマンベースで、その生き方が困難になった場合を「障害」と定義しました。でも国が変われば定義が変わるので、枠に囚われる必要はないかなと。ただ「自分はどうありたいか」をどこかで定める必要があります。海外では「ギャップイヤー」といって、高校卒業後から大学入学、あるいは社会人になる前に1年間の猶予を設けるぐらいです。自分の在り方が定まれば自分の選択に覚悟ができるし、そうありたいと願って行動できる。そんな機会を持ってほしい、これが就労準備支援に込める僕の想いですね。

支援内容や制度以上に「相談者さんの満足度」が大事

荒川：今後リネーブルに期待することはありますか。

黒田さん：1点だけ、最初に始めた「集いの場」を手放さないままでいてほしいですね。行政でいうと、一時生活支援事業では、住まいのない方に当面の衣食住が確保できる場所を提供します。生活保護が必要な方たちもいて、その手を放さずに支えようとすると多角的な支援が必要になり、次の支援に移る時には、一時生活支援のことは過去のものとして忘れられます。事業拡大の話も近いものになります。事業拡大に伴って最初のものが疎かになることもある。代表が変わってもいい、でも理念をわかっている人が事業を広げていかなきゃいけない、そこをどうするか。それが荒川さんに期待するところです。

荒川：居場所の理念を若者たちはしっかり守ってくれている。でも彼らのしんどさを知った上で、新しい人を迎える存在が必要です。そういうスタッフは、なかなか見つからない。それでも世代交代は大切だと思います。若者たちには「居場所もありながら、働く場をつくろう」と伝えています。リネーブルの居場所を捨てずに、私たちの仲間になった若者が1日1時間、1週間のうち1時間からでも働ける場・働ける機会を、あなたたちが作っていって欲しい。いまリネーブルは「仕事と居場所を行き来できる場」になっています。働いていても気分が落ちそうになる若者は多く、しんどい時に弱音を吐ける場があるといい。

黒田さん：そういう「着地できる場所」を残してほしいです。

荒川：私の目標は、若者たちがリネーブルで働く時間を月１６０時間よりも少なくして、なおかつ自分が欲しい給料を得る場にすることです。相談に来る方たちは、いろんな意味でエネルギーを無くしてしまっています。でも解決方法はひょっとしたら「知恵」なのかもしれない。どのようにして不自由しないだけのお金を稼げるかですね。

黒田さん：そう思います。お金を稼ぐためには二つの力が必要です。一つはお金を稼ぐ力そのもの、もう一つはお金を払わない力です。たとえば窓口で相談者さんに「お前に自営業の苦しさがわかるのか」と言われたとき、僕は「わかります」と答えます。起業して廃業もしていますと。一緒に失敗点を洗い出して相談を続けていくと、それで立ち直ってまた事業者になる方もいます。僕には相談支援の理念があって、支援内容や制度よりも「相談者さんの満足度」が大事だと思っています。お金がないと相談に来た方にそのまま１００万円を渡しても、本当のところ、その人はすぐ使っちゃうんです。根本的に解決していない。つまり満たされていないんですね。支援策が少なくとも信頼関係ができ、心が満たされたなら、その後も前向きにがんばってくださるんですよ。

「福祉は人」といわれますが、それを制度でできるようにしたい。誰でもできるような仕組みにするのは行政側の使命です。ご本人の要望も聞きながら、自分たちができる限界も示しつつ、限界の向こう側に行くってその人が決断したときに、どんな支援ができるか。SDGsを掲げる社会で、誰かには適用できることが他の人には認められない世の中はおかしいと思います。支援を求める人の手を離さない、この想いは消えないようにしたいですね。

※就労準備支援事業

生活困窮者自立支援制度に基づき、一般就労に向けた基礎能力を養いながら、就労に向けた支援や就労機会の提供を行います。
詳細は安城市ウェブサイトをご覧ください。

安城市ウェブサイト
生活困窮者自立支援制度